

6. 月の扉 ~ムーンドア~

敦賀市立沓見小学校

6年 松嶋 和花 梅本 真由

↓

各務原市立稲羽東小学校

6年 永井 星波 日比野 真実 加藤 舞美

第一章 夢

『この扉を開けなさい。そうすればきっと……』

ガバッ！ ふー、まただ、この夢。毎回この夢で朝を迎えるあたし、小松^{るな}月。

毎日毎日、この扉を開けなさいって……、同じ夢、同じ場所。言ってる人は分からないけれど、その場所は月。大きな満月。扉には不思議なマークがついていた……と思う。

はじめは気にせずに過ごしていたが、さすがに最近気になってきた。扉の意味と言葉の意味。そしてなんで私の夢の中に……。

第二章 ムーンドア

「月！！ るーなぁー！！」

「おい！ るな！」

「えっ？ 何？ えっ？ ん？ うえ？」

「何って、あんたさっきたおれたんだよ？ 朝会^{あそひ}のとき」

「んーごめん。わからない。ありがと。陽、盟」

この二人は私の友達。女の子の菊地^{きくち}盟と男の子の藤咲^{ふじさき}陽。私はほとんどの日をこの二人と過ごしている。

「なぁ……、俺さぁ……、最近同じ夢ばっかみるんだよな……」

陽がまじめな顔をして言った。

「盟も！！」

「あたしも……」

「俺の夢は、『そうすればきっと……この月の世をすくうことが……』だけで終わり」

わたしはピン！ ときた。

「盟の夢はどんなの？」

「『この月の世をすくうことができる、あなたたちなら……』だけ」

間違いない。

「あたしは、『この扉を開けなさい。そうすればきっと……』」

「なぁ、これって……??」

「この扉を開けなさい。そうすればきっと……」

「そうすればきっと……この月の世をすくうことができる」

「この月の世をすくうことができる……あなたたちなら……って、え？」

パァァー！！

「何これ?? くらいよ! 月? 陽?」

—a bad person…… わるものから key…… かぎを take— うばいかせ

まっくらな所で、女の人が英語で何かを言った。

私たちは何も見えないところで、あ然としていた。

「ねえ……? 陽さあ……、英語得意だったでしょう?」

盟は言った。

「えっ……、ああ……、よくわからなかったけど、key はかぎ、take はうばう……。key take だから、『かぎをうばえ』とか言ってたと思う」

かぎをうばえ……かぎ??

「……おい! あれなんだ?」

「あっ!!」

一夢の中でみたことある。この場面……。

月の扉が闇にうかんでいる……?

「どういうこと……?」

そのとき、誰かは分からないが、女の人が扉からまいおりてきた。

その人は天使というか……魔女というか……人間じゃないのは確かだった。

「あんた……、誰?」

陽が言った。

「陽!? しーっ、失礼だよ!」

そう言っている間に、その誰かは消えてしまっていた。

「……あれ? あの人、どこ行っちゃったのかな……?」

後ろをふり返ってみた。すると……一冊の本があった。この表紙って……扉の模様と同じだ!

「どうする? 開ける?」

私が聞くと、二人はニヤツとして言った。

「もちろん!」

ああー。この二人って、なんでもうんって答えちゃうから、信用できないんだよな……。

「ええ～、ホントに……?」

私が不安そうに言うと、盟が、

「もう! いいじゃん。あたしが開けるっ!」

と言って、パカッと開いてしまった。

えっ? 本じゃないけど……本。なんか……箱の絵が立体になってる。開けようとして上に動かしてみた。ん?……あれ?

「開かないよ?」

盟が言った。その時、私はひらめいた。

「もしかして、この『かぎ』を見つけ出せ! って言いたかったのかな? あの人」

私がつぶやくと、盟と陽は、あっ! という顔をした。

「きっとそうだよ! ねえ、陽?」

盟が言った。

「ああ、行こうぜ！ 月！ 盟！」

陽が言った。

そして私たちは、あの本を持って、暗闇の月のマークが入った扉の中へと旅立って行った。

第三章 旅立ち

「ねえ、どこまで続くのかな？」

盟が不安そうに言った。

だが、誰も答えられなかった。

しばらく歩いたら、ひとすじの光が見えてきた。盟は、うれしそうな顔をしていた。

「わぁ！ きっと、ここにあるんだよ！ 闇の出口かも！ 行こっ！」

「えっ、オイ！ ちょっと待ってば！ オイ！ 聞けよ〜！」

陽が言ったのを聞かずに、盟は一人で走って行ってしまった。とその時、

「キャーッ！！」

大きな叫び声。

「盟？ 盟、大丈夫？ 盟！！」

私たちがかけ寄ると、盟はひざをついていた。

「び……、びっくりした……」

盟がそっとつぶやいた。その目の前には……。

「あ！ あんたこの前の！！」

そうだ。天使でも魔女でも人間でもない不思議な人。その人はニコッと笑いをうかべると、そっと口を開いた。

「私はリア。ムーンドアの見はり役の者ですが、実は薬で眠らされてしまい、悪いやつらにこの世界に入れられたの。だからあなたたちを呼んだのよ」

と説明してくれた。

でも……どうして話せるの？ さっきは話せなかったのに……。

リアが、

「それは盟に会ったからよ」

と言った。……心が読める？

「うん。盟はだまされやすいついていうか、こわいものがないっていうか……まあ、あぶなっかしいの！」

リアの言っていることに、あたしも陽も深くうなずいた。

「だから私があなたを守りにきたのです。どうぞよろしく、盟様。あ、それと、近々私の仲間が現れ、あなたを守りに来るわ。もうすぐよ」

その時、ゴツという音と、痛っ！ という声があった。

「ほら、来たわ」

そこには、リアと同じような服装のかわいらしい人がいた。

(人じゃないかも？)

「って〜！ あ！ お前がもしかして月か？ おもしろい顔してやがるってうわさはホ

ントだな。オレ、シャル。ってことでヨロシクさん」

「わ、この子かわいらしいやん☆ 陽～、あたしティンカ。見ての通り、めっちゃべっぴんさんやろ？ ありがたいと思っときや～。じゃ、よろしく☆」

あたしの守護者はシャル。陽はティンカ。盟はリア。それぞれのパートナーを持ち、新たな冒険への道が、一步一步動き始めた。★

第四章 闇

私達は三人の力を借りて、一度私の家にもどった。

「冒険って言ったって、私達は何をするの？」

私は、聞いてみた。

「それは私が説明するわ」

リアが言った。

「実は、私達の月の国、あるウサギが重力を操って、人間を月へ来させようとしているの。どうしてか分からないけど……」

パッ。とつぜん辺りが暗くなった。

「何？ どうしたの！」

盟がさげんだ。

パッ。すぐに明るくなった。

「元にもどった……。これもウサギの仕業か？」

陽はリアに聞いた。

「ええ、こんな時、月に力を貸してほしいの。闇をてらすのは月でしょ。月には、こんな感じの箱をあける鍵を取り返してほしいの」

リアは、箱の絵を描いて見せた。

「この箱を持っている人が悪いウサギの仲間よ」

この箱どこかで見たような……。私は考えた。

「あっ！ その箱、私が誕生日にお母さんからもらった箱だ！」

「えっ、そうなの？ 今はどこにあるの！？」

リアはあわてて聞いた。

「お母さんが持ってると思うけど……」

私はびっくりして答えた。

「じゃあ、月のお母さんがウサギの仲間かもしれないわ！」

「私のお母さんが？」

私は、びっくりして大きな声で言った。

第五章 秘密の箱

「これがお母さんが持ってた箱だよ」

私は、箱をリアに見せた。

「この箱だわ！ そうよね、シャル、ティンカ！」

「うん」

「そうや、そうや」

シャルとティンカは、答えた。

「ねえ、その箱の中には何が入ってるの？」

盟が聞いた。

「開けてみなくちゃ分からないけど、ウサギが私達に箱を開けられないように鍵を隠しているのは確かね」

リアが答えた。

「その鍵はどこ？」

私は聞いた。

「きっと月のお母さんが持ってるわ！」

リアは言った。

「うそっ、私のお母さん！」

私は、さげんだ。

「月のお母さんはどこにいるの？」

「仕事で化学研究室にいるわ。でもどうやって、奪い返すのよ！」

「鍵を奪い返すために戦ってもらうのは、陽よ」

「えーっ、オレ！！」

第六章 化学研究所へ

そして六人は化学研究所へ行った。そこには英語の問題があった。

「よーし、じゃ解き始めるか」

陽が問題を解き始めたころ、急に辺りがバッと暗くなった。

「あれ？　なんで私のネックレスだけ光ってるの？」

私は気付いた。

「あなたのネックレスは、だれからもらったもの？」

と、リアが聞いた。

「これは、私のおばあちゃんが亡くなる時にもらったものなの？」

私は、言った。

「よし。この光で問題が解ける」

陽が言った。そして問題を全部解くことができた。答えは『key』になった。そして門についた。

「あっ、お母さん」

すると、お母さんはスッと手を前に出し、また問題を出した。今度は漢字ばかり。

「これ、私やりたい」

漢字がとくいな盟が、うれしそうに言った。盟は問題を解いた。答えは『扉』だった。

「あれ？　お母さんがいない」

私は気付いた。

「そこになにか落ちてない？」

ティンカが言った。

「これなに？」

シャルが言った。

「紙だ。『八・七・三』って書いてあるわ」

リアが言った。私は、

「この数字はなんだろう」

と言った。

第七章 謎のナンバーと本

そして、六人は研究室に入った。

「じゃあ、鍵を探しましょう！！」

「^{るほ}月一、あった？」

盟が、聞いた。

「ううん。みんなは？」

「ない」

「この本棚、おかしくないか？」

陽が、とつぜん言った。

「えっ、なんで」

と私は聞いた。

「だって、ここだけ本がないし」

「あ！！ここに私たちが持っている本を入れればいいんじゃない？」

リアが言った。

「あっ、そうかも」

私も賛成した。

「じゃあ、入れてみるか」

スッ、ゴゴゴゴ……。

「すげえ」

陽が、びっくりしている。

なぜなら、本棚が二つに分かれ、その間に金庫があったからだ。

「この箱、ダイヤル式になってる」

リアが言った。

「じゃあ、さっき落ちていた紙のナンバーにすればいいんじゃない？」

盟が言った。

「じゃあ、『key・扉・八・七・三』……開けるよ」

リアが言った。

ガチャ。

「あれ、この中に何か入ってる」

リアが言った。

「鍵と箱だ」

陽が言った。

第八章 悪いウサギの真実

「箱と鍵をつかったのは、人間共に復讐がしたかったからだ。オレを見捨てたヤツらをひどい目にあわせるためだ」

私が話している。でも、これは私ではない。気付いたリアが言った。

『悪いウサギ』が乗り移ったんだわ！」

「一匹でさみしかったんだよう」

ここまで聞いて理解した。陽が言った。

「つまり、悪いウサギは友達がほしかっただけじゃねーの？」

「うーん、そう考えるのが自然やろ」

と、ティンカも賛成した。そこで盟が、

「ねえ！ とりあえず箱をあけてさ、悪いウサギのことは、先生に話して、学校のウサギの仲間になれば？」

「それいいんじゃない？」

私の話し方は、元にもどっていた。

「そうと決まったら、この箱をあけよう」

盟は、張り切って鍵をさしこんだ。

パァァァ。まわりが明るくなって、目をあけていられなくなった。そして不思議な声か。

「ナンテコトヲシテクレタ……。ウワ〜ァ！」

「悪いウサギの本当の声よ！」

と、リアがさげんだ。

第九章 月の扉を開けて

しばらくたって、あたりを見ると、一匹のウサギが倒れていた。そしてどこからかフラフラと人が出てきた。

「お母さん！」

すると盟と陽の声、

「月！ 早く！ リア達が！」

私がかげ寄ると、リア達が光り始めた。

「月、盟、陽、ありがとう。この箱が私達の世界の扉だったのです。あなた達が、箱を開けてくれたので、わたし達の世界に光がもどりました。これで、もう安心です。本当にありがとう」

三人からパァッと光が放たれ、シャルとリアとティンカは、三匹のウサギになった。

第十章 今

元悪いウサギは、ボスと名付けられて、学校のウサギとなり、友達もできた。リア達は、それぞれ月達三人が引き取り、名前はそのまま、いっしょに暮らすことになった。

ある日、三人でリア達を連れて散歩をしていると、陽が言った。
「はじめビックリしたけど、今回の出来事って、けっこうおもしろかったよな」
私も盟も、
「そうだね」
と言った。
今回の事を通して、私達の絆は、いっそう深まったように思えた。